



TITLE:

愛知県厚生連更生病院泌尿器科における1975年度-1982年度の8年間の臨床統計

AUTHOR(S):

和志田, 裕人; 津ヶ谷, 正行; 平尾, 憲昭; 蜂須賀, 祐介

CITATION:

和志田, 裕人 ...[et al]. 愛知県厚生連更生病院泌尿器科における1975年度-1982年度の8年間の臨床統計. 泌尿器科紀要 1984, 30(12): 1885-1897

ISSUE DATE:

1984-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118347>

RIGHT:

愛知県厚生連更生病院泌尿器科における 1975年度～1982年度の8年間の臨床統計

安城更生病院泌尿器科

和 志 田 裕 人
津 ケ 谷 正 行
平 尾 憲 昭
蜂 須 賀 祐 介

STATISTICS ON OUTPATIENTS AND INPATIENTS AT THE UROLOGICAL DEPARTMENT OF KOSEI HOSPITAL 1975～1982

Hiroto WASHIDA, Masayuki TSUGAYA,
Noriaki HIRAO and Yusuke HACHISUKA
From the Department of Urology, Anjo Kosei Hospital
(Chief: H. Washida, M. D.)

Statistical observations of 19,678 outpatients and 2,601 inpatients at our department from 1975 to 1982 revealed the following results.

The new cases in the outpatient clinic were in decreasing order nonspecific infections (50.8%), urogenital tumors (11.9%), urolithiasis (9.3%) and urogenital anomalies (8.0%).

The inpatients according to the organ were in decreasing order kidney (29.6%), prostate (25.5%), bladder (13.4%) and ureter (11.9%).

Operations were performed 2,414 times. Frequent operations were in decreasing order phimosectomy (360 times, 14.9%), TUR-Bt (284 times, 11.8%), transurethral cryosurgery of the prostate (215 times, 8.9%), vasectomy (190 times, 7.9%) and orchiopexy (152 times, 6.3%).

More young persons comprised the outpatients of our hospital than at other facilities.

Key words: Statistics, Urology, Anjo Kosei Hospital, Outpatient, Inpatient

緒 言

今回、われわれは更生病院泌尿器科における1975年度から1982年度までの8年間の臨床統計について検討を加えたので報告する。1973年度¹⁾、1974年度²⁾の統計についてはすでに報告した。なお二つ以上の病名があるものはおのおのの項目に入れた。

外 来 患 者

8年間の外来患者総数は19,678名であり、その内訳は、性別：男子；11,425名、女子；8,253名、男女比は、1.38：1、男子の方が女子より多い傾向にあった。年齢別構成：男子、女子とも0～9歳と30～39歳にお

いて二峰性のピークを描いた。(Fig. 1 以後、図の実線は男女合計を示す。) Fig. 2 は1975年度から1982年度の8年間を前期の4年間(1975年度～1978年度)と後期の4年間(1979年度～1982年度)にわけて各年齢層別患者数を比較した。前期の患者総数は9,283名、後期は10,395名であり、1,112名の患者増となっている。各年齢層別に比較するに、0～9歳と20～29歳では前期が、30～39歳以上では後期が多くなっている。さらに60歳以上の患者数を比較するに前期は1,611名(17.4%)、後期は2,096名(20.2%)と増加しており、近年泌尿器科受診患者の年齢層が高齢化の傾向にあるといえる。外来患者の年度別推移を Fig. 3 に示す。年々増加傾向にあるが1981年度の落ちこみの原因は不

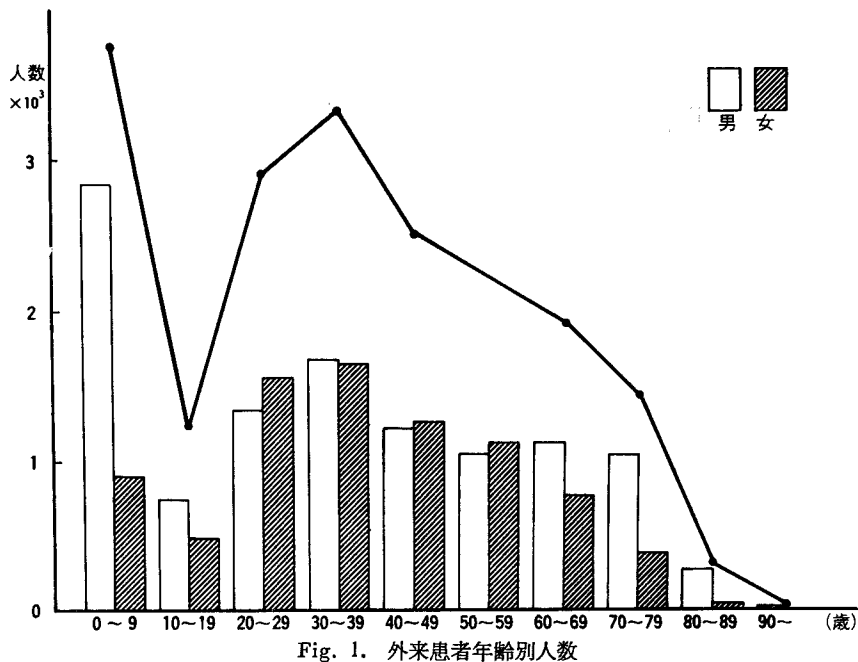


Fig. 1. 外来患者年齢別人数

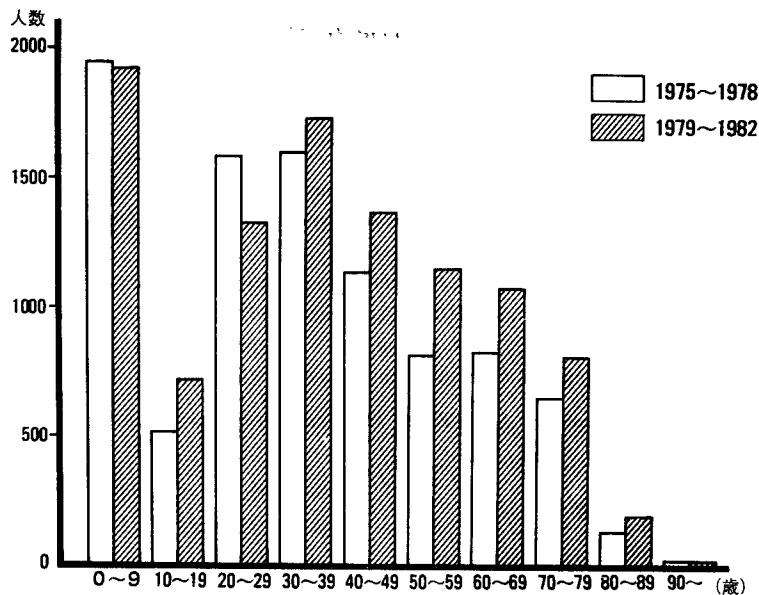


Fig. 2. 1975~1982年度の前半, 後半における年齢別患者数の比較 (外来)

明である。各年度別の新患, 再来数を Fig. 4 に示す。新患患者数は各年度1,745名~2,064名とそれほど大差はないが, 再来患者数は1975年度では273名であったものが, 1982年度では1,089名と約4倍となっている。これは, 悪性腫瘍, 結石症, 複雑性尿路感染症などの長期の follow up を必要とする患者が増加してきているものと考えられた。紹介患者の新患患者における割合は, Table 1に示すようにこの8年間では平均院

内紹介8.2%, 院外紹介10.3%であったが1982年度においては, 院内紹介262例(13.7%), 院外紹介283例(14.8%)と合計545例(28.5%)であり, 1975年度と比較して約2倍となっている。これは他科医師の泌尿器科疾患に対する関心の高まりを示すものといえよう。

外来患者の主要疾患について略述する (Table 2).

1) 尿路結石症 (Table 3)

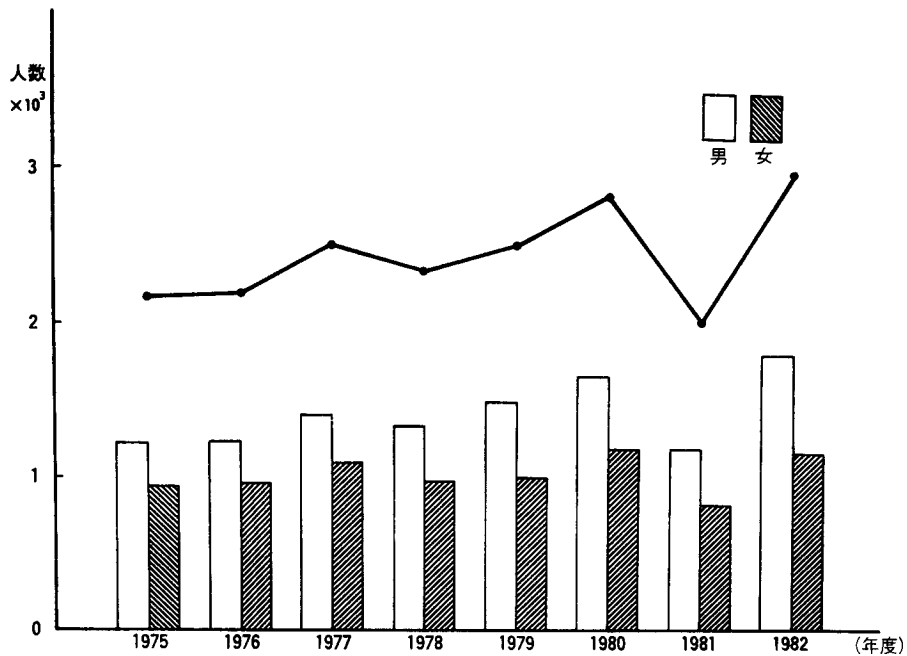


Fig. 3. 外来患者の年度別推移

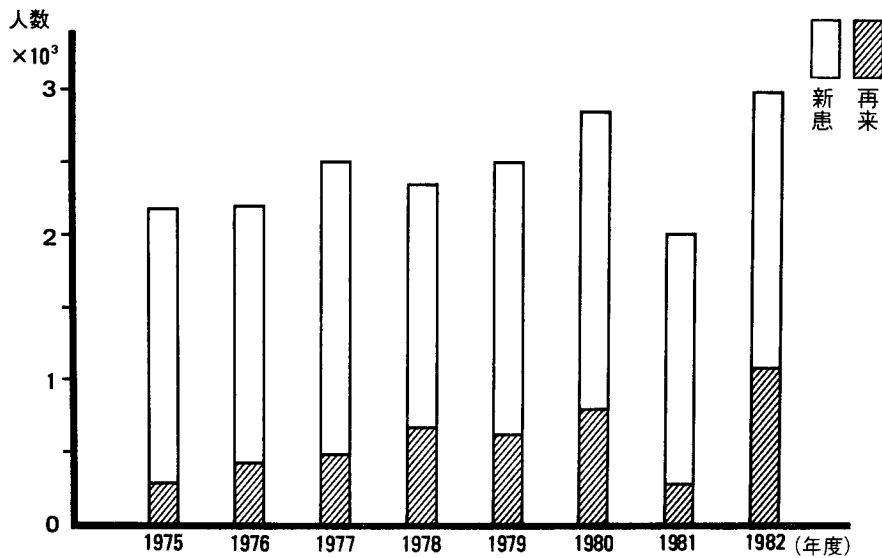


Fig. 4. 新患, 再来別, 外来患者数

患者総数1,750名, 男子1,263名, 女子487名で男子に多い傾向にあった。尿管結石がもっとも多く, 左側が517例, 右側が448例, 両側が21例であった。つづいて腎結石, 前立腺結石の順である。Fig. 5は尿路結石症患者の年度別推移を示す。年々増加傾向にあり, これには超音波診断技術の導入による診断能力の向上が一役かっていると考えられる。

2) 尿路性器腫瘍 (Table 4, L)

男子においては前立腺肥大症が1,438名, 74.9%と大きな割合を示している。以下, 前立腺癌, 膀胱癌の順である。女子では尿道肉阜がもっとも多かった。腎腫瘍においては1975年に両側腎腫瘍³⁾を, 1981年には腎過誤腫⁴⁾をそれぞれ1例ずつ経験している。

3) 尿路性器結核 (Table 4, R)

Table 1. 紹介患者の新患数における割合

年度 種類	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1975~1982
院内紹介	119 (6.2)	129 (7.2)	155 (7.6)	101 (6.0)	129 (6.9)	196 (9.5)	148 (8.5)	262 (13.7)	1239 (8.2)
院外紹介	149 (7.8)	171 (9.6)	216 (10.6)	204 (12.1)	176 (9.4)	226 (10.9)	116 (6.6)	283 (14.8)	1541 (10.3)
非 紹 介	1649 (86.0)	1488 (83.2)	1672 (81.8)	1385 (82.0)	1575 (83.8)	1642 (79.6)	1481 (84.9)	1361 (71.4)	12253 (81.5)
計	1917	1788	2043	1690	1880	2064	1745	1906	15033

() は各年度毎の新患数における%

Table 2. 外来患者の主要疾患 1975~1982

主要疾患	性別	男	女	計
尿 路 結 石 症		1263	487	1750
尿路性器腫瘍		1919	326	2245
尿路性器結核		109	151	260
尿路性器奇形		1038	466	1504
非特異性炎症		4753	4833	9586
その他の上部尿路疾患		586	406	992
その他の下部尿路疾患		831	600	1431
その他の男子性器疾患		1119	—	1119
計		11618	7267	18887

Table 3. 尿路結石症 1975~1982

部位	性別	男	女	計
腎・腎盂	右	150	74	224
	左	159	78	237
	両	73	34	107
尿 管	右	318	130	448
	左	362	155	517
	両	19	2	21
膀 胱		67	13	80
尿 道		14	1	15
前 立 腺		101	—	101
計		1263	487	1750

患者総数は260名で、女子に多い傾向にあり、腎結核は174例にみとめた。

4) 尿路性器奇形 (Table 5, L)

患者総数1,504名中、真性包茎440例、腎下垂415例、停留睪丸314例、とこの3疾患で77.7%と大部分を占めた。

5) 尿路性器の非特異性炎症 (Table 5, R)

Fig. 6 は年度別推移であるが、常に1,000例を越す患者数がある。男子では非淋菌性尿道炎1,271例、龟头包皮炎1,204例と多く両疾患で全体の52.1%と過半数を占めた。女子では膀胱炎が圧倒的に多く約88.5%であった。Table 6 上は淋菌性尿道炎、非淋菌性尿道炎の年度別推移を示す。非淋菌性尿道炎の方が淋菌性尿道炎に比べて圧倒的に多いのがわかる。しかしながら、当科では淋菌性尿道炎の診断には外尿道口よりの膿中の淋菌の証明(塗抹あるいは培養)を必須としているので病歴より淋菌性尿道炎が疑われても、淋菌が証明されなかった場合、またはすでに他医で治療を受けていたケースなどで淋菌が証明されない場合などは非淋菌性尿道炎として扱っているので決して淋菌性尿道炎が少ないとは考えがたい。

6) その他の上部尿路疾患 (Table 6 下)

水腎症が男子276例、女子145例、合計421例とも

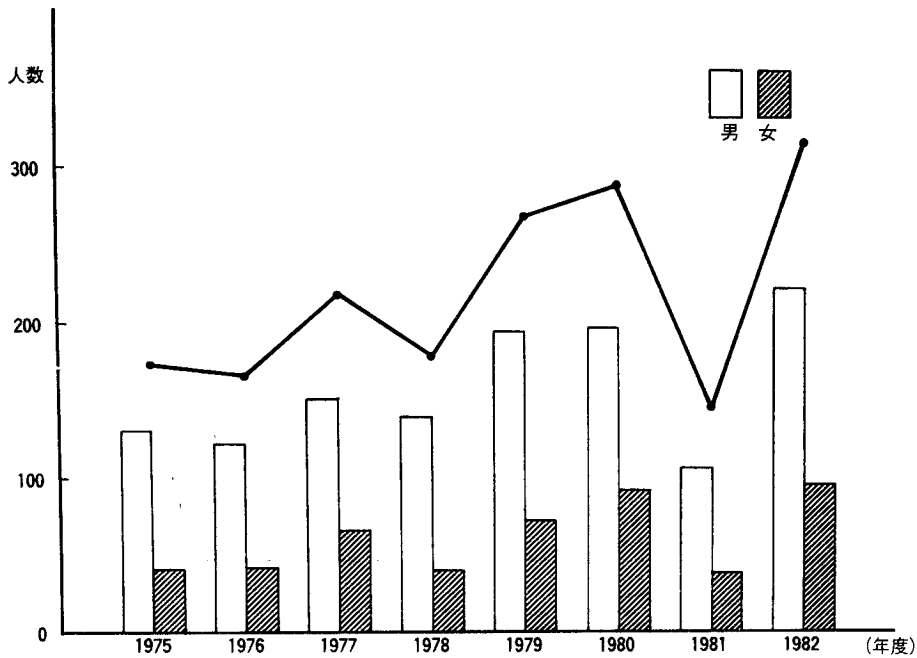


Fig. 5. 尿路結石症患者年度別推移

Table 4. 尿路性器腫瘍 1975～1982

種類	性別	男	女	計
腎 癌	右	9	10	19
	左	14	3	17
腎 盂 癌	右	4	2	6
	左	6	3	9
尿 管 癌	右	1	1	2
	左	3	0	3
膀胱 癌		182	38	220
前立腺 癌		212	—	212
辜丸腫瘍 (悪性)	右	7	—	7
	左	7	—	7
尿道 癌		5	1	6
陰 茎 癌		9	—	9
前立腺肥大症		1438	—	1438
尿道肉阜		—	232	232
尖圭コンジローム		16	—	16
尿道ポリープ		5	34	39
ウィルムス腫瘍		1	2	3
計		1919	326	2245

L

尿路性器結核 1975～1982

部位	性別	男	女	計
腎 結 核	右	27	45	72
	左	20	49	69
	両	16	17	33
膀 胱 性器結核		9	40	49
計		37	—	37
計		109	151	260

R

っとも多かった。ついで糸球体腎炎が224例と多かったが、近年健康診断の普及によりいわゆる顕微血尿の精査により腎炎が全疾患の1.2%の割合で見つかっている。

7) その他の下部尿路疾患 (Table 7, L)

男子では夜尿症、尿道狭窄が多く、女子では膀胱神経症が多かった。

8) その他の男子性器疾患 (Table 7, R)

患者総数1,119例中、男子不妊症266例、陰のう水腫260例、前立腺症173例、が多かった。

Table 5. 尿路性器奇形 1975~1982

種類	性別	男	女	計
重複腎盂尿管		46	76	122
形成不全腎		3	9	12
馬蹄鉄腎		5	5	10
のう胞腎		16	6	22
腎下垂		85	330	415
腎杯憩室		6	1	7
尿管瘤		1	4	5
尿管異所開口		1	1	2
V. U. R.		56	34	90
真性包茎		440	—	440
埋没包茎		6	—	6
尿道下裂		59	—	59
停留睾丸		314	—	314
計		1038	466	1504

L

尿路性器の非特異性炎症(外来患者) 1975~1982

種類	性別	男	女	計
腎盂腎炎 急		162	267	429
慢		155	287	442
膀胱炎 急		640	2512	3152
慢		55	1767	1822
尿道炎 非淋菌性		1271	—	1271
淋菌性		75	—	75
龜頭包皮炎症		1204	—	1204
副睾丸炎 右		189	—	189
左		187	—	187
両		16	—	16
睾丸炎		17	—	17
前立腺炎 急		188	—	188
慢		594	—	594
計		4753	4833	9586

R

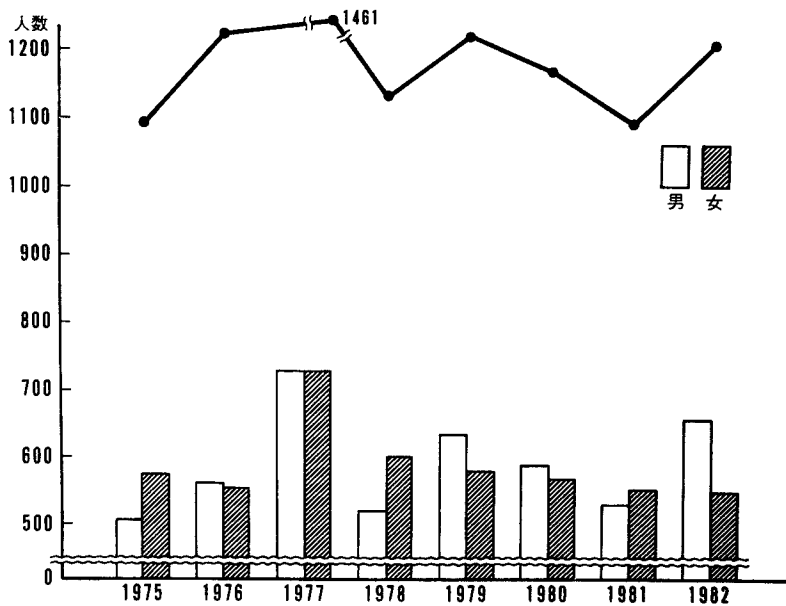


Fig. 6. 尿路性器の非特異性炎症年度別推移

以上外来患者の主要疾患を総括すると、男子では、非特異性炎症、尿路性器腫瘍、尿路結石症の順で、女子では、非特異性炎症、その他の下部尿路疾患、尿路結石の順であった。男女まとめると、非特異性炎症 9,586例 (50.8%)と過半数を占めており、以下、尿路性器腫瘍2,245例 (11.9%)、尿路結石症1,750例 (9.3%)、尿路性器奇形1,504例 (8.0%)、その他の下部尿路疾患1,431例 (7.6%)、その他の男子性器疾患1,119例 (5.9%)、その他の上部尿路疾患992例 (5.3%)、

尿路性器結核 260例 (1.4%)の順であった。

入院患者

入院患者総数は2,601名で、男子が2,038名、女子が563名、男女比 3.62 : 1と男子の方が多い傾向にあった。

1) 年度別性別入院患者 (Fig. 7)

1977年度は病棟改築のため 198名と減少しているが他の年度は常に年間 300名を越える入院患者数となっ

Table 6. 淋菌性および非淋菌性尿道炎の年度別例数

年度 疾患	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	合計
非淋菌性	99	155	203	148	192	186	143	145	1271
淋菌性	3	8	6	10	3	11	0	34	75
合 計	102	163	209	158	195	197	143	179	1346

その他の上部尿路疾患 1975～1982

種類	性別	男	女	計
水 腎 症		276	145	412
偏側性無機能腎		25	26	51
特発性腎出血		129	63	192
糸球体腎炎		87	137	224
腎後性腎不全		38	12	50
蛋 白 尿		25	21	46
腎性高血圧		15	2	17
計		586	406	992

Table 7. その他の下部尿路疾患 1975～1982

種類	性別	男	女	計
夜 尿 症		229	110	339
膀胱神経症		69	189	258
神経因性膀胱		117	112	239
尿 失 禁		128	109	237
膀胱憩室		6	4	10
膀胱異物		0	6	6
尿道狭窄		212	45	257
外尿道口のう腫		12	0	12
尿 道 脱		0	15	15
膀胱頸部硬化症		58	0	58
計		831	600	1431

L

その他の男子性器疾患 1975～1982

種類	人数	計
男子不妊症		266
血 精 液 症		114
性器發育不全		12
性的ノイローゼ		1
前 立 腺 症		173
陰茎持続勃起症		2
形成性陰茎硬結		18
仮 性 包 茎		74
嵌 頓 包 茎		21
陰 萎		11
陰 の う 水 腫		260
精 索 水 腫		74
辜 丸 稔 軽 症		6
辜 丸 過 敏 症		5
移 動 性 辜 丸		82
計		1119

R

ている。なお、現在の当科の入院定床数は33ベッドである。

2) 入院患者年齢別人数 (Fig. 8)

0～9歳と70～79歳で全体の36.8%を占め、高齢者にピークがあるのが外来とは趣きを異にしている。この理由は以下に述べる疾患の種類の差によるものと考えられる。また、この8年間の入院患者をおのおの4年ずつ前期、後期にわけて検討した。前期、後期の年

齢別患者数の比較は Fig. 9 のごとくで、やはり高齢層では後期の患者数が前期に比べて多い。ちなみに60歳以上の前期の患者数は469名(39.7%)、後期は595名(41.9%)と後期に増加の傾向を示した。

3) Table 8は入院患者の主要疾患を示す。男子においては、尿路性器腫瘍が775名、40.6%で第1位であり、以下尿路結石症、尿路性器奇形と続く。女子では、尿路結石症が、134名22.7%で第1位、以下、その他

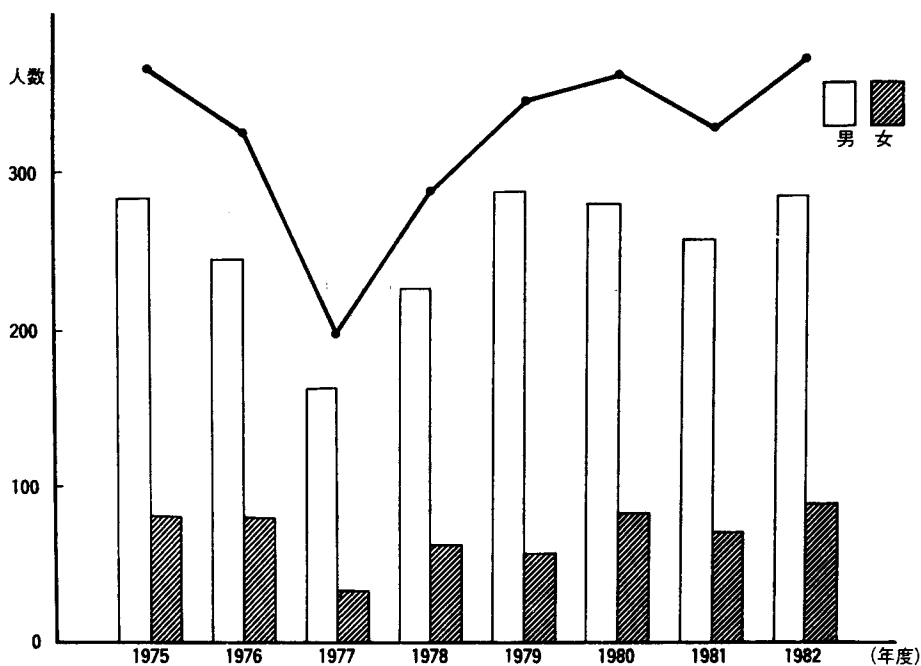


Fig. 7. 入院患者年度別推移

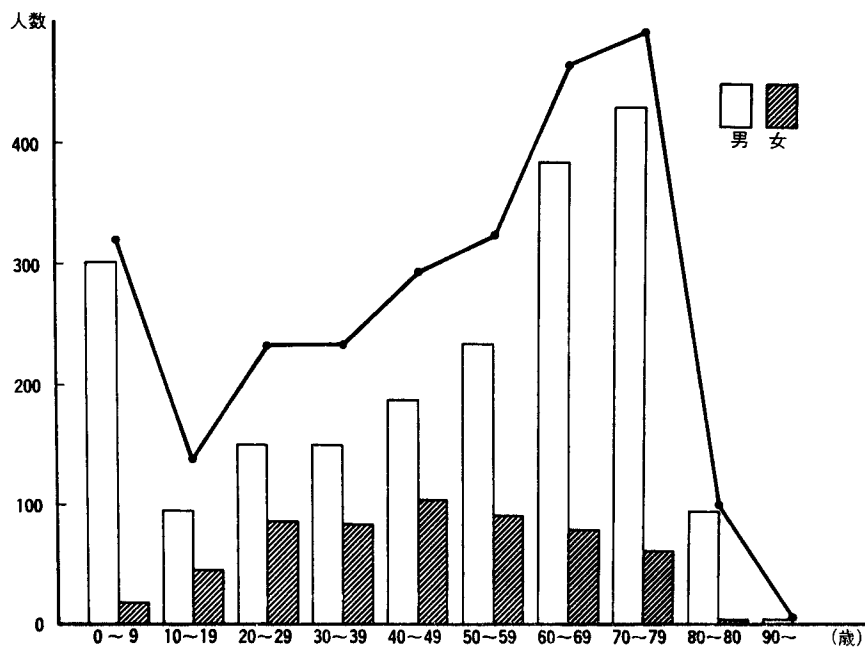


Fig. 8. 入院患者年齢別人数

の上部尿路疾患, 非特異性炎症と続く。男女全体としては, 尿路性器腫瘍が853名, 34.1%, で第1位, 第2位は尿路結石症の417名, 16.7%で以下 Table のごとくであった。

4) 臓器別入院患者数 (Table 9, L)

男子では前立腺関連疾患が620名と約1/3を占めておりこの中には前立腺肥大症が456名(73.5%)占めていた。つぎに腎, 膀胱, 睪丸の順である。女子では, 腎, 尿管, 膀胱の順に多かった。

5) 尿路性器悪性腫瘍 (Table 9, R)

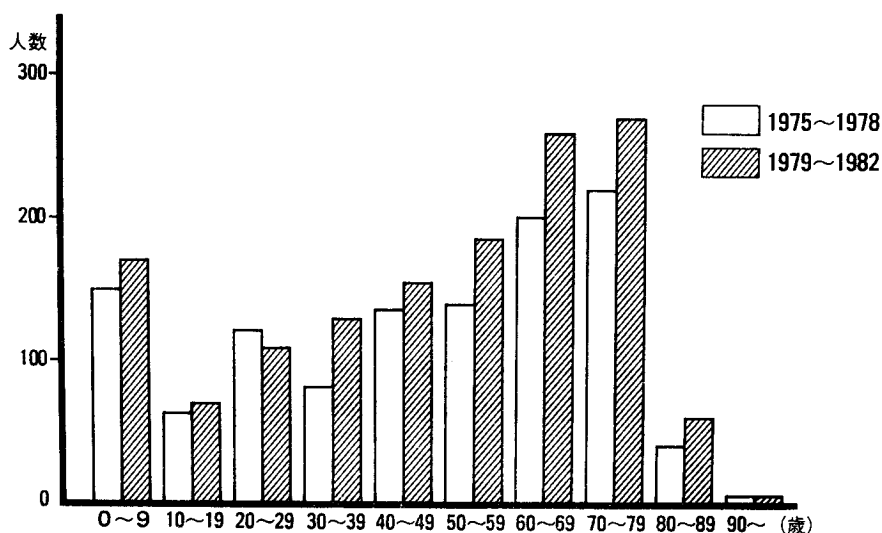


Fig. 9. 1975~1982年度の前半における年齢別患者数の比較 (入院)

Table 8. 入院患者の主要疾患 1975~1982

主要疾患	性別		計
	男	女	
尿路結石症	283	134	417
尿路性器腫瘍	775	78	853
尿路性器結核	25	46	71
尿路性器奇形	255	56	311
非特異性炎症	160	118	278
その他の上部尿路疾患	222	132	354
その他の下部尿路疾患	88	26	114
その他の男子性器疾患	103	—	103
計	1911	590	2501

Table 9. 臓器別入院患者数 1975~1982

臓器	性別		計
	男	女	
腎	408	314	722
尿管	186	104	290
膀胱	243	84	327
尿道	107	48	155
陰茎	28	—	28
辜丸	227	—	227
副辜丸	56	—	56
精索	11	—	11
前立腺	620	—	620
計	1886	550	2436

L

尿路性器悪性腫瘍 (入院)

臓器	性別		計
	男	女	
腎	31	10	41
腎盂	8	0	8
尿管	7	1	8
膀胱	160	25	185
前立腺	124	—	124
辜丸	16	—	16
尿道	1	2	3
陰茎	8	—	8
その他	6	3	9
計	361	41	402

R

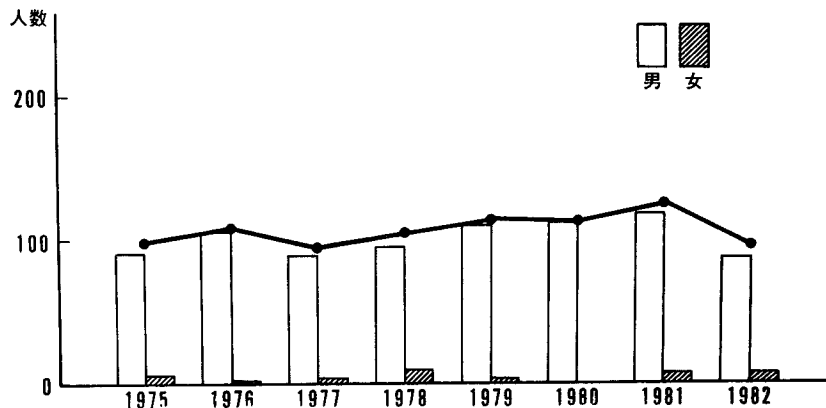


Fig. 10. 尿路性器腫瘍年度別推移 (入院患者)

圧倒的に男子に多く (89.8%), 膀胱癌, 前立腺癌が多かった。女子では, 膀胱, 腎の順で多い。Fig. 10は年度別推移であるが, 常に年間100名前後の入院患者数があつた。

6) 術式別手術統計 (Table 10)

もっとも多いものから, ①包茎根治術 (360例, 14.9%), ②TUR-Bt (284例, 11.8%), ③経尿道的前立腺凍結術 (215例, 8.9%) ④精管結紮術 (190例, 7.9%), ⑤睪丸固定術 (152例, 6.3%) であつた。Table 11は1975年度から1982年度までの8年間を前期の4年間 (1975~1978年) と後期の4年間 (1979~1982年) とにわけ, 手術内容の推移を検討した。増加した手術では, 膀胱, 前立腺, TUR-Bt, TUR-Pなどの経尿道的手術があげられる。いっぽう減少した手術は, 経尿道的前立腺凍結術, 精管結紮術, 包茎根治術であつた。経尿道的前立腺凍結術は同時に精管結紮術を施行したため, この2つの減少は相関傾向を示した。包茎根治術は医師数の不足により極力制限を加えたことによると思われる。後期において当科では尿路変更術に回結腸導管術を施行していること, 開胸式腎摘術をおこなっていることなど治療法の変化が手術内容にも反映されている。1975年度, 364例あつた手術件数が1982年度では247例となった。この絶対数の減少は包茎根治術, 精管結紮術, などの小手術, ならびに経尿道的前立腺凍結術の減少によると思われる。さらに麻酔の種類の内訳 (Table 12) をみるに全麻件数については1975年度は349件中99件, 28.4%であるのに対して1982年度では247件中133件, 53.8%と増加している。いわゆる大手術が増加してきていると考えられる。

6) 死亡統計 (Table 13)

1975年度から1982年度までの死亡者数は, 男子75名,

平均年齢67.7歳, 女子11名, 平均年齢65.2歳, 合計86名, 平均年齢67.3歳であつた。原疾患は, 頻度順に, 男子: ①膀胱癌, 29名, ②前立腺癌, 14名, ③腎癌, 5名, 女子: ①子宮癌, 3名, 以下 Table 13のごとくであつた。死因別順位では, ①悪液質 32名, ②心不全 14名, ③腎不全 11名, 以下 Table 13のごとくであつた。なおこの死亡例のうち, 前立腺摘出術後の再生不良性貧血の1例¹⁾, 悪性リンパ腫の1例²⁾, 脳腫瘍より発見された左腎癌の1例³⁾, 睪丸腫瘍の1例⁴⁾は各々学会において発表した。

考 察

臨床統計をほかの医療施設と比較する場合には, その病院の地域における位置づけ, 病院の性格, 特殊性など複雑な因子を考慮せねばならないが, とりあえず大学病院⁵⁻⁸⁾と一般診療病院⁹⁻¹¹⁾とに大別し, 今回のわれわれの臨床統計と比較した。外来患者の年齢分布においては, 調査したいずれの施設でも50~60歳台においてピークがあるのに対して当科では0~9歳と30~39歳において二峰性のピークを描いた。若年者にピークを示したことは外来の主要疾患を比較した場合にもその傾向がうかがえる。つまり当院では非特異性炎症がいずれの施設よりも高値 (50.8%) を示し, 尿路性器腫瘍がもっとも低値 (11.9%) を示した。しかしながら, これは当科における腫瘍患者数が少ないという意味ではなく, 統計上, 重複病名として非特異性炎症の数が多くなったためと考えられる。ちなみに当科における年平均の腫瘍患者数は280.6名, 最近4年間では295.5名と増加の傾向にあり, これは大学病院を含むほかの医療施設と比較しても高値である。さらに泌尿器科的疾患には感染の合併が多く, このことも非特異性炎症患者のみかけの増加に役かっているものと

Table 10. 手術統計（術式別）

（ ）内は他の手術と同時に行なわれた手術の例数を示す。

術式	年度	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	合計
腎 摘 出 術		13	12	5	9	10 (1)	9	10 (1)	9 (2)	77 (4)
腎部分切除術		1	5 (1)	5 (3)	1 (1)	2	3	2	4 (1)	23 (6)
腎 切 石 術		> 11	> 5	> 10	> 7 (1)	6 (1)	> 4	0	2	55 (2)
腎 孟 切 石 術								2	8	
腎 孟 形 成 術		0	0	0	0	0	0	4 (1)	(1)	4 (2)
腎 瘻 術		1	0	0	0	0	0	0	0	1
尿管切石術		18	13	10 (1)	11 (2)	10 (2)	11	13	24	110 (5)
尿管皮膚瘻術		2	7	8	10	10 (2)	5 (6)	5 (2)	6 (1)	53 (11)
膀胱全摘術		0	0	0	0	2 (3)	7	3 (7)	(7)	12 (17)
膀胱部分切除術		1	2	(1)	3 (1)	(1)	2	2 (2)	1	11 (5)
膀胱尿管新吻合術		4	5 (1)	2	0	6	1 (1)	2	0	20 (2)
膀胱瘻術		0	0	0	0	2 (1)	3	0	1	6 (1)
膀胱切石術		(1)	0	0	0	3 (4)	3 (1)	1 (1)	3 (1)	10 (8)
回結腸導管術		0	0	0	0	0	0	7	7	14
骨盤内臓器 全摘出術		0	0	0	0	0	0	0	(1)	(1)
前立腺摘出術		10	10 (1)	7 (1)	14	25	22 (2)	19 (1)	11 (1)	118 (6)
水 圧 療 法		12	1	0	0	0	0	0	0	13
辜 丸 摘 出 術		> 9 (1)	> 6	> 5	> 4	> 6	> 5	> 6 (1)	3	45 (2)
副辜丸摘出術									1	
陰のう水腫根治術		8	4	6	6 (1)	0	6	5 (2)	9	44 (3)
辜 丸 固 定 術		7	6	11 (1)	11	38	29 (1)	21	27	150 (2)
陰 莖 切 断 術		2	5	2	1	0	3	1	1	15
尿道形成術		0	0	5	5	7 (1)	3	3	4 (2)	27 (3)
包 莖 根 治 術		70	53 (3)	28 (1)	52 (1)	38 (4)	31	45 (2)	31 (1)	348 (12)
精 管 結 紮 術		20 (42)	18 (54)	8 (1)	6	10	12 (1)	9 (2)	5 (2)	88 (102)
精のう腺撮影		10	10	2	1 (3)	5	5	1	2	36 (3)
尿道肉阜切除術		5	10	2	3	4	0	0	1	25
経尿道的 膀胱腫瘍切除術		56	22	40	23	33	28	33 (1)	47 (1)	282 (2)
経尿道的 前立腺切除術		22	25 (1)	11 (1)	7	12	9	26 (2)	16 (1)	128 (5)
経尿道的 前立腺凍結術		39	57 (1)	32	37	25	10	13	1	214 (1)
そ の 他		43	25 (1)	19 (4)	34 (18)	37 (5)	22	34 (12)	20 (6)	248 (46)
計		364 (44)	301 (83)	218 (14)	245 (28)	291 (23)	245 (12)	255 (36)	247 (28)	2166 (248)

Table 11. 手術内容の推移
—前半 (1975~1978), 後半 (1979~1982) との比較—全手術件数における%で示した

臓器, 術式	年 度	1975 ~ 1978	1979 ~ 1982
腎		7.1%	7.3%
尿管		6.4%	8.5%
膀胱		8.1%	16.1%
前立腺		3.4%	7.1%
TUR-Bt TUR-P		16.3%	18.4%
経尿道的 前立腺凍結術		12.9%	4.3%
精管結紮術		11.7%	3.6%
包茎根治術		16.3%	13.4%

Table 12. 麻酔の種類

種類	全身麻酔	腰椎 硬膜外	麻酔	局所 伝達	合計
年度					
1975	99	142		108	349
1976	82	87		131	300
1977	77	68		73	218
1978	85	56		108	249
1979	126	69		93	288
1980	116	48		81	245
1981	121	63		74	258
1982	133	66		48	247
合計	839	599		716	2154

結 語

更生病院泌尿器科における1975年度~1982年度の外来ならびに入院症例について統計的観察をおこなった。

1) 外来患者総数は19,678名で, 男子, 女子ともに非特異性炎症がもっとも多かった。

2) 入院患者総数は2,601名で, 臓器別入院患者数では, 男子は前立腺, 女子では腎が多かった。

3) 手術統計では, 包茎根治術, TUR-Bt などが多かった。

4) ほかの医療施設との比較をおこなった。当科においては若年者にピークを描く患者構成であることが外来患者における特徴であった。

文 献

- 1) 和志田裕人・上田公介: 泌尿器科臨床統計 (1973年7月より12月まで). 更生病院のあゆみ (昭和49年度年報): 197~200, 1975
- 2) 和志田裕人・上田公介: 愛知県厚生連更生病院泌尿器科における1974年度の臨床統計. 泌尿紀要 22: 669~673, 1976
- 3) 和志田裕人・上田公介・平林紀男: 両側腎腫瘍の1例. 泌尿紀要 22: 19~24, 1976
- 4) 和志田裕人・津ヶ谷正行・伏見 登・加藤次朗・平林紀男: 特異な腎過誤腫の1例. 日泌会誌 74: 853~860, 1983
- 5) 郡山和夫・西 昇平・蓮井良浩・山口孝則・大藤哲郎・棚田敏文・斉藤 康・新川 徹・長田幸夫・石澤靖之: 宮崎医科大学泌尿器科における1982年の臨床統計. 西日泌尿 45: 1281~1287, 1983
- 6) 室本哲男・川上一雄・前原 進・花咲宏一・小野浩・田戸 治・石部知行: 島根医科大学医学部泌尿器科教室における開設後1年3ヵ月間の臨床統

考えられた。また, 当院の位置する安城市は, 豊田自動車およびその関連企業が集合している都市群のひとつであり, 以前のような農村地区から近年では, ベッドタウンとしてあるいは工業地区としての性格を強くしていることから若年層の患者が多いのではないかと考えられた。つぎに入院統計を比較するに, 年齢別患者数においては, いずれの施設においても60歳台付近にピークがあり, 高齢者にピークがあることはどの施設においても同様であろうことが推察された。主要疾患においては, どの施設でも腫瘍が第1位を占めた。当科においても第1位, 34.1%であり, ほかの施設と比較しても平均的な値となっている。以下, 結石, 奇形が多い疾患となっており, 当科においてもほぼ同様の結果が得られた。手術に関しては, 8年間平均の手術件数は302件と他施設よりも多い傾向にある。経尿道的手術は25.9%であり, 診療病院の平均18.7%より高く, ほぼ大学病院の平均23.8%に匹敵する割合であった。

Table 13. 死亡統計 (1975～1982)

1 死亡者数	男子	73名	平均年齢	68.8歳
	女子	10名		68.1歳
	合計	83名		68.7歳

2. 原疾患および死因(頻度順)

原 疾 患		死 因	
順位	男	順位	女
1	膀胱癌 29	1	子宮癌 3
2	前立腺癌 14	2	腎炎 1
3	腎癌 5		回盲部癌 1
4	前立腺肥大症 4		ネフローゼ 1
5	睾丸腫瘍 3		腎結石 1
6	腎結石 2		悪性リンパ腫 1
	尿道狭窄 2		膀胱癌 1
	陰茎癌 2		腎癌 1
	慢性腎不全 2	合計	10
10	腎結核 1		
	腎盂腎炎 1		
	腎後性腎不全 1		
	尿管癌 1		
	膀胱結石 1		
	肺線維症 1		
	後腹膜腫瘍 1		
	胃癌 1		
	肺炎 1		
	栄養失調 1		
合計	73	合計	83

計. 西日泌尿 44: 327～330, 1982

- 7) 岡島英五郎・平松 侃・伊集院真澄・平尾佳彦・小原壮一・塩見 努・馬場谷勝廣・丸山良夫・窪田一男・駒田佐多男・佐々木憲二・三馬省二・末盛 毅・吉田克法：奈良県立医科大学泌尿器科学教室における1979年の臨床統計. 泌尿紀要 28: 1325～1334, 1982
- 8) 百瀬俊郎・妹尾康平・上田豊史・伊東健治・黒田憲行・吉峰一博・北田真一郎・河野博巳・水之江義充・簗田 優・今村 章・上原康雄・木宮公一・徳田倫章・安増哲生：九州大学泌尿器科学教室における1982年度の臨床統計. 西日泌尿 45: 1273～1279, 1983
- 9) 吉田宏二郎・渡辺秀次：大和高田市立病院泌尿器科における新設1年間の臨床統計. 泌尿紀要 25

: 81～85, 1979

- 10) 尾本敏男・八木拓朗・高山一生・田中正利・加治慎一・田辺一成：九州厚生年金病院泌尿器科の1982年度臨床統計. 西日泌尿 45: 1289～1294, 1983
- 11) 安食悟朗・中村 章：新潟市民病院泌尿器科における約7年間の手術統計. 西日泌尿 44: 331～335, 1982

<学会発表>

- 1) 第134回東海泌尿器科学会名古屋地方会にて発表.
- 2) 第137回東海泌尿器科学会岐阜地方会にて発表.
- 3) 第1回尿路悪性腫瘍研究会にて発表.
- 4) 第8回尿路悪性腫瘍研究会にて発表.

(1984年6月26日迅速掲載受付)